

# 九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No.235

2014(平成26)年 2月 7日(金)発行

●全蠶という作曲家佐村河内守さむらこうちまもる氏には十数年、実の作曲者がいて、そのウソがばれました●小さなウソはすぐばれますが、大きなウソにはみんなだまされ続けます●「原発は安全、電気が不足、放射能の影響はない」など東電・政治家・マスコミ・国・政府・安倍首相のウソに国民はまだだまされたままです●「まあソチ五輪が終わるまでは、原発のウソ情報を発表しておくか」と。



## 3.11東日本大震災・原発事故の体験 35 その1

### 浪江町には原発事故について政府から一切の連絡なし

双葉郡浪江町(元浪江町職員・郡山市に避難中) 屋中茂夫さん(61歳・会員)

2011(平成23)年 3月11日(金)

#### 14時46分 大地震発生

私は双葉郡浪江町役場職員でしたが、東日本大震災の地震の時、浪江町役場庁舎3階の教育委員会事務局で仕事をしていました。

地震は14時46分、浪江町も震度6強を観測。揺れは3分以上続いてだんだん強くなり、事務室のロッカーは次々に倒れた。私は思わず「ロッカーから離れる!」と叫びました。机の下に身を寄せる職員、廊下に出る職員、庁舎内は大パニックです。外を見ると、民家の屋根瓦やお寺の屋根瓦が落ちるのが分かりました。

揺れが収まるのを待って直ちに、馬場有(たもつ)浪江町長を本部長とする「浪江町災害対策本部」を設置し、被害の状況把握に努めました。私は小中学校の状況把握を職員に指示しました。各消防団からは、次々に被害状況が入ってきました。

**15時33分** 大津波の第一波が浪江町沿岸部に到達。その後数度の大津波が襲いました。庁舎4階から海岸方面を見ると、浪江町立東中学校の近くまで波が押し寄せているのが確認されました。

#### 請戸小学校の児童は全員無事に避難

浪江町立の6小学校中、特に注目したいのは、海岸から約150mの位置にある町立請戸(うけど)小学校のことです。児童83名は全員学校に残っていましたが、校長の素早い適切な判断で、西方約1kmの「大平山」という小高い丘に避難。その後国道6号線に向かい山道を通り抜け、通りかかった大型トラックの荷台に乗せていただいて、夕方に役場庁舎隣のサンシャイン浪江に全員無事避難できました。

▼海岸からわずか150mの浪江町立請戸小学校は大津波に襲われて壊滅。しかし児童83名は適切な判断のおかげで迅速に避難し、全員が無事でした。



サンシャイン浪江には約3,000人が避難し、職員は避難者の名簿作成や炊き出しを行いました。

#### 原発事故の状況も避難についても政府から浪江町への連絡は一切なし

**16時45分** 東京電力福島第一原子力発電所で、電源喪失の旨、東電から政府へ通報(ラジオで確認)・・・浪江町への連絡は一切ありません。

**21時23分** 政府は東電第一原発から半径3km圏内の住民に避難指示を出し、その後、10km圏内の住民に屋内退避指示を出しました。・・・浪江町への連絡は一切ありません。

#### 高い放射能の阿武隈山地の津島地区に8,000人の浪江町民が避難し被曝

3月12日(土) SPEEDIの発表もなく

**5時44分** 政府は半径10km圏内の住民に避難指示を出しました。・・・浪江町への連絡は一切ありません。浪江町はラジオ放送を聞いて、独自に10km圏外の町立苅野小学校や大堀小学校はじめ公共施設への避難誘導及び避難を開始しました。

**13時00分** 浪江町は半径20km圏外の津島地区への避難勧告、避難を開始し、同時に災害対策本部を、本庁から西へ約32kmの「浪江町役場津島支所」へ移動しました。町民の避難の交通手段は、町のマイクロバス、マイカー、民間の大型バスボランティアで約4~5台。津島までは普通なら車で約35分程度ですが、この日は大渋滞で約5時間かかりました。津島地区の避難所になったのは、小中学校、高校、集会所等で、約8,000人が避難しました。私はつしま活性化センター勤務となり、会議のために災対本部の津島支所とセンターとの約1kmを、毎日3回徒歩で往復しました。後で分かったことですが、その頃津島地区は大変高い放射能に被われていたのです。

**15時36分** 東電第一原発1号機で水素爆発。

**18時25分** 政府は半径20km圏内の住民に避難指示を出しました。しかし、SPEEDIの発表もなし。・・・浪江町への連絡は一切ありません。

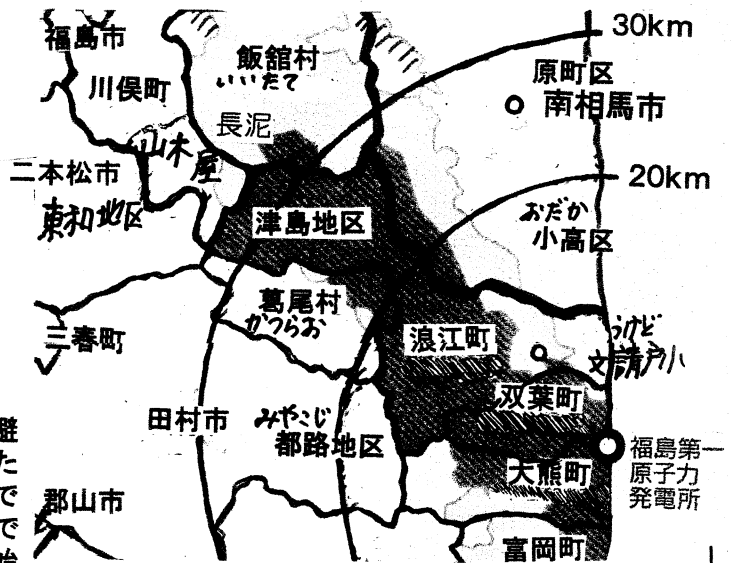
3月14日(月) 11時01分 3号機で水素爆発

(裏面に続く)



プロメテウスの畏 防護服

▲原発爆発を恐れ浪江町民約8000人は津島地区に避難。しかしそこには高い放射能が降り注いでいたが、SPEEDIの発表も避難指示も一切なかったのです。『朝日新聞』『プロメテウスの畏』は、津島地区での町民の被ばく取材した「防護服の男」から連載が開始されています。(▲写真は2011年10月3日『朝日新聞』)



【津島地区への避難の状況】

政府からは何の情報もなく  
高い放射能の中で遊んでいた子どもたち

3月12日から15日まで、つしま活性化センターに避難した約1,000人の町民の様子ですが、炊き出しの配給時は、外に並んで食糧をいただき、外で食べる人もいました。14日は小雪の舞う日でしたが、子どもたちは外で遊んでいました。(後日わかったことですが、実は津島地区は高線量の放射能に被われていたのです。)センターのトイレは処理容量がオーバーしたため、消防団員が外に手掘りの仮設トイレを設置しました。

私は3月28日まで津島支所に勤務し、他の職員4名と、常駐していた約30名の自衛隊員と一緒に未避難者の対応や救出にあたりました。職員は町内の地理が分かっているということで、自衛隊員に同行しました。私自身はこの間、浪江町内に7回出向きました。

**3月15日(火) 4時30分** 浪江町独自の判断で、二本松市と避難先の受入れについて協議開始。

**6時10分** 東電第一原発2号機で爆発音が発生。

**10時00分** 浪江町長は、町全域に避難指示命令を出し、二本松市への避難を決定しました。

**11時00分** 政府は、半径20~30km圏内の住民に屋内避難指示を出しました。…浪江町への連絡は一切ありません。同日浪江町は二本松市東和地区の旧校舎や体育館等に避難所を開設。災害対策本部を「二本松市東和支所内」に移動しました。

**3月28日(月)**

私は、二本松市役所東和支所に移動し、「教育支援班」を命じられました。主たる業務は、避難児童1,097名、生徒608名の安否確認と名簿の作成、新学期の準備、避難先での就学の対応でした。

**4月1日(金)**

浪江小・中学校の全教員は、二本松市東和町の旧校舎・木幡第二小学校を借用し勤務することになりました。教育支援班にも5名の教員が配置され、学校再開等の準備にあたりました。

浪江町の小中学生の震災調査の結果、中学生2名が津波の犠牲になり、両親を亡くした孤児が3名、片親を亡くした遺児が8名と分かりました。

【避難時の小・中学校の状況】

新学期は、町の就学支援規則改正で対応

町民は2、3日で自宅に戻れるだろうと考えて避難したので、着の身着のまま所持金もない状況でした。そのため4月からの学校就学準備が大きな問題になりました。

カバン、運動着、ドリル、給食費などのお金の問題、慣れない土地での通学手段の問題等、保護者にとっても多くの課題を抱えての新学期でした。窓口での対応、電話での問い合わせなどで4月、5月は大変混乱でした。

国、県では、就学援助制度の見直しが進まず、課題は全然解決しません。そこで、町の就学支援制度規則を一部改正し、予算を流用確保し、支援に努め、全国に避難した町民にも通知しました。

平成23年8月25日、浪江町は二本松市の旧川崎小学校に浪江小学校を、旧針道小学校に浪江中学校をそれぞれ開校。もちろん事前に、改修、清掃、表土剥奪などの除染工事も終えてのことです。

児童生徒は全国各地へ散らばって

平成23年4月18日(震災直後)の浪江町在籍児童生徒数  
・小学校6校1,097名 ・中学校3校608名

合計1,705名 やがて震災後、この1,705名の児童生徒は、全国46都道府県、241市町村、749校に区域外就学し、不慣れた環境の中で学校生活を送り、卒業を迎えています。子どもたち、親たちのことを思うと、本当に胸が痛みます。

平成23年8月25日(2学期)、二本松市内に開校

・浪江小学校1年3名 2年2名 3年3名 4年3名  
5年8名 6年9名 計28名 ・浪江中学校 1年10名  
2年11名 3年12名 計33名 合計61名

長洲剛さんはじめ全国各地から様々な支援が

浪江町は、全国各地から多くの激励文、支援物資、義援金等の御支援をいただき開校できました。

特に①ジャニーズグループからの支援金、②福島民報社と中国民報社の教材備品の寄贈、③シンガーソングライター長洲剛氏からは小学生20名を8日間の鹿児島招待、④チェコ政府は中学生30名を14日間の招待、⑤福島大学生による仮設住宅での学習支援、等々感謝申し上げます。ちなみに、長洲剛さんの曲『カモメ』は浪江町の被災地を、また『ガーベラ』は鹿児島に招待された子どもたちを歌った曲で、大変感動的なものです。

<2013年8月4日記・次回に続きます>